

くすのき

カトリック立川教会 教会報

掲載目次： 第188号（2011年9月11日発行）より抜粋して掲載しています

- 自己紹介 主任司祭 チェレスティーノ・カヴァニャ……………1
神様が主人公の私たちの人生 井上 洋治 神父様……………2
私たちの守護の聖人 聖ピオ十世教皇について チェレスティーノ 神父様……………3

自己紹介

主任司祭
チェレスティーノ・カヴァニャ

 チェレスティーノ神父様から、改めて「自己紹介」としてメッセージを頂きました。 

立川教会の皆さん、自己紹介が遅くなりました。

4月までの11年間、東京教区本部事務局で働いて、カトリック教会の色々な活動、課題や問題を間近に見て、教会の中核に役立てることを光栄に思っていました。やはり司祭だから小教区に戻りたいと、数年前から強く感じていました。ですから司祭人事の時に、岡田大司教から立川教会に行ってくれないかと言われたときは迷わずに、喜んで行きますと返事しました。教区司祭としては初めての地になります。よろしくをお願いします。

数年前に東京教区司祭になりましたが、それまではミラノ外国宣教会の宣教師として福岡教区（佐賀県鹿島教会）、横浜教区（山梨県甲府教会）、東京教区（府中教会）で働いてきました。

宣教師になることは10歳の時の急な決心でした。司祭になることなど考えたことはなかったのに、ある宣教師の誘いを受けた時、「全世界に行って、すべてのものに福音を宣べ伝えなさい」（マルコ16・15）とい

う言葉はイエス様が私に直接、言っていることだと感じました。親は私の内向的な性格を知っていて、私には無理だと反対したにもかかわらず、小神学校に入り14年の教育を経て24歳になる年に司祭叙階、次の年に日本に派遣されました。考えてみれば、日本語学校で言葉の勉強を始めたときから33年経っています。日本語は難しいです。

第二バチカン公会議後の宣教会の教育は小教区での司牧よりも小教区以外の福音宣教を重視していました。若い宣教師同士で新しい宣教方法が必要だと話し合い、色々な試みが行われました。大学で外国語を教えながら若者たちとの関わりを広げていく司祭、青年労働者に関わる司祭、ホームレスのために活動する司祭もいました。他方、先輩の宣教師たちは小教区での宣教司牧を軽視しないように忠告してくれました。諸宗教との対話が勧められていた時代でしたが、私は特に他の宗教に興味があったので、来日当初から教会での司牧と並行して仏教の学びと坐禅の修行をしてきました。

カトリックの大学で数年間宗教学を教え、自分の宣教方法として諸宗教との対話を考えていましたが、教区本部の仕事がだんだん忙しくなり、宗教の研究と大学の授業は断念しました。

これからは大司教の手伝いの仕事も少しありますが、皆さんと一緒に立川教会を盛り立てていきたいと思えます。

ところで司祭は独身ですから、いつでも何よりも早く対応できる印象があると思えますが、そのためにも休みとプライベートな時間が必要です。心の成長には勉強だけではなく、生命の様々な姿を見つめることも不可欠で、休みが取れると私は、カメラを持って自然の中を歩くことを特に好みます。草花、水は悩みなくただ生きていて、時々想像もできない美しさを見せてくれます。道端の石は悠久の時の中に存在しています。

その美しさを見て写真に撮れた時は感動して、自分も力強く生きる元気が出ます。

教会の維持管理も大事ですが、信徒の皆さんと一緒に聖書と教会の教えを深めてイエス様の愛のうちに霊的に成長することを目指したい。今社会の中で悩んだり、迷ったりする人が多い中、イエス様の弟子となった私たち信者は希望と光になればいいと思えます。日本でのカトリック教会は小さいものですが、いつも輝いていれば必ず人々の導きとなれることを忘れないでください。



輪の会主催講演会

6月19日(日) 風の家運動主宰の井上洋治神父様が84歳というご自分の老いを見つめ、「一本の老木」という自作の詩を紹介しながら、講演してくださいました。その内容を編集部でまとめました。

「神様が主人公の私たちの人生」

井上 洋治 神父様

学生時代に出会ったリジュエーの聖テレジアの靈性に惹かれて以来、生涯を通して聖テレジアの後姿を追いかけて生きてきたように思います。



私は聖テレジアの弟子として84歳という老年を迎え、長いマラソンの最後に競技場へ入ってきたような今、84歳ならではの話をしたいと思えます。

「厳しい冬の青空を背にして葉を落としたった一本でこんなところに立っている 老木よ」、で始まるこの詩は風の家運動を始めた50代半ば

の張り切っていた時代に書きました。若い自分が寒さに震えて立っている老木の姿に感動して書いたのですが、今私はその老木になっています。外から老いを眺めることと、実際に老いを背負って生きていることは全く異なります。

老いというのは若い時には自分のものだと思っていた視力や健康を少しずつ神様にお返ししながら生きているということです。人の為になにかする、役に立つという根底の生きがいすらお返ししています。若い人に“老い”というものをどうしても理解してもらえない、一人ぼっちになってしまうという恐れもあります。年のせ

いで団欒の中に入れない、大勢の中の孤独感は辛いものです。ついこの前までできていたことができなくなるのも辛いです。そうしたことで落ち込んだ時には地動説を唱えたコペルニクスの転換が必要です。

アウシュビッツに収容されていた精神科医のヴィクトル・フランクル著、『夜と霧』は人間の限界状態の中で書かれたものです。自分が人に何ができるか、喜んでもらえるかということを考えていては収容所では生き延びることはできません。何もできないけれど、苦しいけれど、家族や友人が私にどう生きてほしいと思っているか、その人たちの眼差しを感じられれば生き延びることができたというのです。

私たちに何ができるか、役立つかを考えることが難しい時に、他者(神様)の眼差しを思い、その眼差しを受け止めれば、そこに人生の意味が現れてきます。現実にもできなくなっても、他者の気持ちを受け入れるところに人生の意味があるのです。

“自分が何をするか、社会で役立つか”ではなく、神様がその人を通して何を伝えようとしておられるのか、神が望まれることをする場が人生なのです。粗大ゴミになっていく自分になんの意味があるのかと思い煩わず、神が私という作品を作り、それを使って神の望みを示しておられるということに気づき、考えをそのように転換しなければ、老いの虚しさはなくなりません。

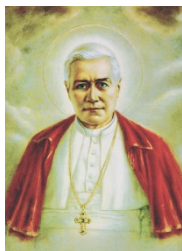
聖テレジアは神が作られた大自然の中の小さな白い花になり、神が語られることを示していきました。「南無アッパ」と唱えてアッパ、お父ちゃんに全てを無心にお任せして生きていきましょう。

「山路きてなにやらゆかしすみれ草」



8月21日、立川教会の守護の聖人・ピオ十世(在位期間/1903年8月4日~1914年8月20日)の祝日に行われた記念ミサでは白柳枢機卿様から贈られた聖遺物(遺骨の一部)が祭壇に飾られ、チェレスティーノ神父様がお説教の中でピオ十世についてお話しくださいました。

私たちの守護の聖人



聖ピオ十世教皇について

日本では教会を地名で呼びますが、欧米では守護の聖人の名で呼び、つねにその聖人を意識し、祈りを捧げ、聖人から学び、信徒として力を発揮しています。ですから、それに習えば立川教会は、「聖ピオ十世教会」となるわけです。

ピオ十世の本名はジュゼッペ・サルト。1835年、イタリア北部のヴェネツィア近郊の小さな村に8人きょうだいの長男として生まれ、父は郵便配達の仕事をしていたといわれます。ジュゼッペは幼い頃から司祭を志し、小神学校に進んで23歳で叙階されました。

50歳でマントヴァの司教に任命され、優しさと強さをあわせ持つ熱心な司牧と、とりわけ子どもたちへの配慮、国中が疫病に襲われた際は病者を手厚く支えたことなどで知られています。弱い人々を守り、権力を振りかざす政治家などの強者には厳しい司教だったそうです。

やがて枢機卿に任命され、ヴェネツィアの大司教を経て68歳の時に教皇の候補となりまし

たが、当時イタリアは長く続いた諸外国(フランス、スペイン、オーストリアなど)の支配から独立を果たし、激動のさなかにありました。独立したイタリア政府は、ヴァチカンが所有していた広大な領土を取り上げ、教皇の権限が及ぶのはヴァチカンの中だけと定め、政教分離が進みました。「教会は社会生活に口をはさむな」という風潮が広がりつつあったのです。政治的混乱の中で教会が全てを失った時代でしたが、ピオ十世は司祭や信徒をしっかり教育することを基本とし、混乱した社会を建て直して人々の信仰を守ろうとされました。

彼は、まず教皇庁の改革を行い、ムダな機関や施設を整理して司祭が働きやすい環境を整えることから着手しました。公教要理の編纂(へんさん)を行い、さらにカトリック教会の運営について定めた教会法の法典化に乗り出し、それはピオ十世の死後数年のうちに発行されました。以来、世界中のカトリック教会で共通に用いられています。

御聖体を6歳以上の子どもが受けられるようにしたのもピオ十世です。それ以前、御聖体は展示して崇めるものであり、ミサのたびに頂くことなどできませんでした。御聖体を頂けるのは、完全完璧な生活をしている成人に限られ、しかも必ず許しの秘蹟を受けてからとされて、子どもが頂くことはできなかったのです。

また明治時代、日本での宣教が再開されて30年ほど経った頃、フランスのパリ外国宣教会だけに任されていた宣教活動を、他の修道会にも開いたのがピオ十世でした。それに伴ってイエズス会が訪れ、やがて上智大学が設立されたのですから、日本と縁のある聖人といえます。

さらにいくつかのことをお話ししましょう。教皇は幼きイエズスのテレジアを崇敬し、信徒にもそれをすすめていました。また、不思議な癒しについての記録があります。体が不自由で歩くことのできなかつた子どもが、ピオ十世に抱きしめられた後、歩けるようになったこと、教皇の死後、彼に祈った人に癒しがもたらされたことなどが知られています。

このように偉大な方ですが、教皇になってから身の回りの世話を任せていた2人の妹たちには、ヴァチカン内に一室だけを与え、ご自身も生涯、質素な生活を貫いたといわれます。教皇はもともと権力者に厳しい方だったので、政治家や社会主義者からもたびたび批判を受けましたが、混乱の時代にあっても信仰を守り、神と共に生活をすれば何も恐れることはないのだと、身をもって示されました。

＊

ピオ十世を守護の聖人としていただいた私たちも誇りを持ち、この偉大な聖人から多くを学びたいものです。ムダなことに煩わされず、大事なことに集中しましょう。神の言葉とキリストの愛を实践して生き、与えられた使命を果たすことができるようピオ十世に祈りましょう。

